例えばこんな刀使さん

ブロｘ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

夜見お姉さん達親衛隊サイドに起きた、とある剣劇。

刀使ノ巫女という作品に刃鳴散らす要素を入れて妄想してみました。前作、『例えばこんな燕結芽ちゃん』の続きのような物です。

作者の妄想全開で、殺陣描写がトーシロ感満載の長ったらしいお話です。

ＵＡ１０００突破…、こんな駄文を読んで下さりありがとうございます。

目次

前編 ―― 1
ブレイドアーツ　1 ―― 14
中編 ―― 19
中編　ブラッド・スター ―― 26
後編 ―― 37
後編　ソードソーサラー ―― 45
ブレイドアーツ　2 ―― 55

前編

本日未明、大型の荒魂が発生。危険ですので周辺住民は速やかに避難して下さい。

――先程からＴＶやラジオといったメディア媒体から垂れ流されている情報は、これだけだった。

「荒魂接近！　接触まで２０ｓ（セカンド）!!」

「陣形編成!!全隊、インペリアル・クロス!!!」

「・・・会敵ッ!!!!」

「撃て――ーーーーッッッ!!!!」

荒魂というのは、突如として現れる人類の敵の一つである。

何故敵だと判ったのかは歴史が証明しているので、細かい理由は前線の戦士達には関係が無かった。

「荒魂が跳んだぞ!!!」

「山岳地誘導の後、排除行動ッッ!!」

「陣形を決して崩すなッ!!!」

成すべき理想は二つ。この街の治安と民衆の生活を守る事。

戦士達は銃砲火気類による面制圧によって荒魂の動きを停めた。次いで、ひと気の無い場所へと移動させて一点集中砲火による殲滅行動。

――完璧である。

相手が怪獣王か蝙蝠だけが知っているゴールデンなバットでもない限り、人類に負けは無い。彼らの作戦に不備もなければ落ち度も無い。

「クーガ０１中隊――残弾無し・・・ッ」

「クーガ０２中隊――全火器損傷・・・ッ！」

勝ちも無い、とも言えるかもしれないが。

「円陣防御ッ!!!!　訓練通り！」

「了解ッッ!!!」
「新鮮な弾だ！　早く!!!!」
「盾構え――――ーーーッッッ!!」
　巨大なる荒き御魂は、人類の銃砲火気類のみを瞬時に破壊していた。
　そして重量という質でもって体当たりを人類のフロントライン（最前線）に打ちかます。
「押せ――――ーーーッッッッ!!!!」
　紙一重、盾持ちの戦士達が踏ん張る。ある者は奥歯を砕き割り、またある者は腓を返しながら。
「押せ――――ーーーッッッッ!!!!」
　荒魂の大移動を止めるべく。戦士達が、昂然と顔と牙を上げる。過去幾多の先達がこうやって戦ったのだろうかという敬意と共に。
　・・前線の戦士達の間に口伝でのみ伝わり続けている話に、スターダストメモリーという物がある。生き残った人間が例えここに居らずとも、戦いが有る限り失伝も忘却も永久に無い星屑の記憶達だとか。
「押せ――――ーーーッッッッ!!!!」
　この雄叫びこそが、正にそれ。
「オオ押せ――――ーーーッッッッ!!!!」
　――人口密集地に往かせるわけにはいかない。異物はここ（人界）に居てはいけない。
　戦士達の想いは、昔も今も唯一つ。
　――ここで食い止める。
「　8！&$%9　」
　大盾を構えながら猛然と足を踏み出し続ける戦士達に、その時妙な音が聞こえた。
「　8！&$%9　」
「・・・・？」
　それは言語なのか、よく解らない。
「　8！&$%9　」

でも気持ちの悪い音ではある。心臓が、頭が割れそうになるくらいには。
しかも誰かの血が垂れ出し、まぶたを覆って眼球に到達した模様。ひどくひり付いて痛い。
――――切れた？　いやに痺れるが。全身も、この足も脳みそも。
「　８！＆＄％９　」
足は止めない。でも全部が全部ぼうっとして、音だけが聞こえる。
・・・仲間の怒声。鹿児島出身の中隊長の猿叫。軋む大盾と、自分の骨。
死の足音。
心臓の鼓動。
荒魂の声。
「　８！＆＄％９　」
――――武器を捨てよ。
「　武器を奪ってみせろ　」
一歩を踏み出した男達の大盾が全て砕かれた。　意識が急速にゼロに、死という名の絶対値に近づいた正にその時。
「――お見事です」
三途の彼方か。ここ鉄火場に、不似合いなほど美しい刃が見えた。

◇

「――――……」
静かな人だったと、この場に居た戦士達の一人は後に語ったという。
病院で傷の治療を受けながらの受け答えであったが、あの女性の印象だけはずっと残っていると。
「…あとは私が承りますので、皆様は退避及び、防御態勢をお願い致します」
そして、とても真っ白な人だったとも。

「――『写シ』」
白刃を鞘から抜き、右肩担ぎに構えながら、妙に頭に響く言葉を女性は発した。特に身体に変化は無いように男達には見えたがしかし、
「折神家当主親衛隊・第三席――――皐月夜見」
これこそが彼女の戦闘態勢であると、この場にいる戦士達の全員が悟った。
「参ります」
・・・今夜、自分達はツイていたようだ。　痛めた肩を擦りながら、戦士達は呟いた。
巨大な荒魂の頭部、四肢に当たる部位、そして体の中心部。その全てが瞬く間に細切れに成っていく様を見て。
「――――晩酌が美味くなる」
ビョウ、という刃鳴の音。鯉口に納まる切っ先。
こちらを見やる夜梟の視線。
「良い仕事を有り難うよ、特別祭祀機動隊員殿」
彼女は『神薙ぎの巫女』とも、『特別祭祀機動隊』とも語られる。
「…、礼は要りません」
刀身を最後まで鞘に納めるその様は、まるで暗夜の空に佇み続ける鷲木菟（ワシミミズク）。
「仕事ですから」
そうでしょう?と、皐月夜見は眼で述べ、互いに敬礼を交わす。
「お勤めご苦労様です、皆さん」
――――人は彼女の事を、『刀使』と呼んだ。

◇

例えばこんな刀使さん　（前編）
『ＩＮ　ＭＹ　ＳＰＩＲＩＴ』

「親衛隊の刀使は皆優秀なご様子。　何よりですね」
「当然かと」
　――刀使が扱う御刀の管理を取り仕切る御家に、折神家というものがある。
　京の龍安寺もかくやと言われる程の玉砂利で敷き詰められた庭は勿論、そこを臨める当主の一室であるここもまた由緒ある伝統と格式、そして広々とした空間と荘厳とが同室していた。
「遅ればせながら、我が娘をどうぞよろしくお願いします紫様。まだまだ貴女や他の親衛隊の方々に教わる事が、山のようにあるでしょうし」
「……かつての私のように、ですか？先輩」
「何の事やら」
　互いに笑みを浮かべる。堪えきれないほど。そこにはかつて、先輩後輩の間柄であった旧友がいた。
　和服に身を包む燕家の当主。
　隙無くぴっしりと洋服を着こなす折神家当主・折神紫。
「先輩。ところで貴女が今日ここに来たのは、娘の赴任先への挨拶と様子見。合っていますか？」
「６０点です。　もう一声欲しい所」
「……久しく見ていない愛娘の、結芽の姿が見たいから」
「ん～～１００点っ！」
　短く溜め息を吐きながら、紫は子煩悩な一児の母を見る。…昔はまるで抜き身の刀だと言われていた頃を想うと、さらにやるせなくなった。
「結芽はあの若さで天然理心流の極地にまで至ったとか。　流石は貴女の娘ですね」
「まだまだ手間のかかるだけの子ですよ、紫様。それで結芽はどちらに？」
「声は掛けたので、もう時期ここに来る筈ですが……」
「――――お母さんっ!!!」

部屋中にバァンッ！という音を響かせながら扉が開かれた。
音源に振り向きながら両手を広げる人物と、入ってきた新入りの刀使を同時に見てしまった為、部屋の主である紫は急性の偏頭痛に襲われた。
「ここには来ないでって言ったでしょ！　何で来るのっ!!?」
「仕事よ、結芽。貴女はまだ知らないでしょうけど、茶飲み友達とお喋りするのは主婦の立派なお勤めなんだから」
「だからってわざわざここに来る事ないでしょ!!　他所でお茶飲んでればいいじゃん！」
「冷たいわ～紫様。子供なんてね？ランドセル卒業したらすぐこれよ、反抗期。暗い夜の帳りの中へ、行く先も解らないまま『迅移』で走り出しちゃったりするのよ！」
「…私は独り身なのでよく分かりません。あと、それは三年後です」
娘、燕結芽は１２歳である。
「紫様もっ！お母さんの言う事いちいち真に受けないでよ!!」
「知っているさ」
「それにしても安心したわ、結芽。　貴女肺が弱いからお母さん心配だったのよ」
「ちゃんと鍛錬してるもんっ！平気だよッッ!!」
迫真の音量だが、ナデナデと効果音が付く程に頭を撫でられて目を細めている燕結芽の様子を見ると、まったくもって説得力が無かった。
「先輩。もうそれくらいで……」
これから来客があるので、親子水入らずのお話は他所でやって欲しい。
紫がそう言おうとした瞬間、規則正しいノックの音が聞こえた。
「入れ」
「失礼します。　親衛隊第三席・皐月夜見、入ります」
音も無く入室し、こちらに歩いてくるその姿を見て、燕の母は眼をとめた。
淀みも無駄も一切無い一挙手一投足。左腰に帯びている御刀は

仰々しくも主張しすぎず、それでいて存在感が静謐である。
厳かというよりかは静水といった方が良い。これぞ折神家当主親衛隊、すなわち近衛の名に相応しい立ち居振る舞いであった。
「――出来るわね、貴女」
「…ようこそおいで下さいました。ごゆるりと」
「ほら行くよ！夜見おねーさんの邪魔しないの、お母さんっ！」
母と娘。親子二人は部屋を出る。
仲の良いその後ろ姿を、夜見と紫はじっと見つめ続けていた。

◇

「此度の作戦の首尾は完璧だったようだな。機動隊の者達が感謝していたぞ、夜見」
「職務を果たしたまでの事です」
「謙虚なのが持ち味なのは良い事だ。…そういえば、真希や寿々花には会ったか？」
「はい。先程」
「彼女達もお前を心配していた。仲間意識が高い事は、決して悪い事ばかりではない。…分かるな？」
「はい」
「では皐月夜見。別命あるまで、お前は平常任務に戻れ」
「了解致しました。　皐月夜見、これより平常任務に戻ります」
一礼し、部屋を出る。平常任務とは、荒魂出現等の大事があるまで自由行動という意味である。
履いている靴の調子を少々確認し、窓から射す陽差しで明るい廊下をこうして歩いていると、まるで自分は日向の中を揚々と進んでいると夜見は錯覚する。親衛隊・総勢四名、今日も日当たり良好と。
――まさかである。
「……」
親衛隊の刀使は第三席を除いて全員が粒揃い。　此度の作戦、彼女達であれば自分よりも速く、そして上手く事を運べただろう。皐月夜

見は自分を過信しないし、過小評価もしない。
これは客観的見地からくる、純然たる事実であった。
「……」
――胸を押さえる。弱さという胸のざわめきを、そっとこの身体の深奥に閉じ込める。
荒魂を祓い、あの御方の為に刃を振るう事こそ己の職務。それは生きる理由でもあると、夜見は思う。
「……、」
――仮に。もし仮にこのどれもが当てはまらない自分がいたらと思うと、ゾッとする。
例えばそれは小学生の時に習った足し算引き算、掛け算割り算。それをある日忘れて、二度と思い出せない。
そうなったらそうなったで奮起してまた勉強に熱を上げる、…無理である。 まあいっか！と気楽に人生を生きる、……無理である。
何故なら。
「職務を果たす事が、人の生きる理由です」
夜見にとって『今まで』というのは、生きてきた年月ではなく修業期間。『これから』というのは、将来ではなく実行期間。…そう信仰している。
「――稽古でもしましょうか」
この胸の奥の奥。そこから滲み出し五体を纏うこのざわめき。
・・・歩を進める。堪えきれないほどに、皐月夜見は歩みを速めた。

◇

「やっとお母さん帰ってくれた～…、ホンっト子離れ出来ないんだからも～！」
折神家当主親衛隊・第四席、燕結芽が折神邸の廊下をトストスと足音を立てながら闊歩するその様は、さながらシルバニアファミリー構築の際に生じる可愛らしいものだった。
振動で規則的に揺れる長い髪は彼女の輝かしい将来を約束し、眉間

の真中に眉を寄せるその顔はお人形さんのように外連味がない。
　このまま成長すれば、燕は大和撫子となれるだろう。楚々として、それだけでなく芯強く。
　彼女の母がそうであるように。
「紫様ー！何かお仕事無いですか～っ!!　私いま物凄く働きたいー！」
　おおブッダ。
　手をブンブン振り回しながら叫びながらのこれでは撫子というより菓耳（おなもみ）である。草むらに入るとズボンにくっついちゃう、ほらアレ。
「もうヒマでヒマで～！……ゑ？」
　そんな燕が扉を開けた先は、針山の獄であった。
「――紫様の御前で。何事だ？　結芽」
「……」
「高津のおばちゃん…」
　細められた眼光は糸くずを通す隙間さえ無い剣山にも似て。それに触る者近づく者、その全ての臓腑の裏と表を縫い付けて離さない。
　――折神家が御座する鎌倉の地。そこの刀使育成機関の一つ、鎌府女学院学長・高津雪那は燕に鋭い視線を向けていた。
「もう一度聞く。　折神家当主執務室であるここで、そのザマは何だ？燕結芽…！」
「あ～……う～…そので、すね……」
　手持ち無沙汰に動きに動くこの両手が示しているように、燕はこの高津雪那という女性が苦手であった。
　纏う雰囲気と言えばいいのか、彼女の眼光やら立ち居振る舞いを見て取っても、一体何が楽しくて毎日を生きているのだろう？と感じてしまう。
　――得体の知れないというより、関わり合いになりたくない。
　傍に居るとそんな思いが脳裏に生まれる燕であった。…これでも昔は刀使だった名残り故か、実力は折り紙付きと見ているのだが。
「雪那、彼女は私が呼んでいたのだ。――騒がせてすまなかった」

「……そ、相楽のおばちゃんっ!!!」
最近知った言葉、『地獄に仏』とは正にこんな時に使う諺なのだろうと燕は思った。
この部屋の主である折神紫とは一風違って、静かな、それでいてどこか優しい雰囲気と洋服を身に纏いながら、彼女を手招きする女性がいる。
――刀使育成機関（通称伍箇伝）の一つ、京都にある綾小路武芸学舎学長・相楽結月はここに立っていろと自分の隣りを促した。
「綾小路学長が…？　なら仕方ありませんね」
「っほ…」
胸をなでおろす。　その姿を、相楽結月は目元だけ笑って見つめていた。
「では話を続けます。　紫様、これなるは鎌府女学院一年・糸見沙耶香。紫様の御為、必ずやお力になれると思い、この度紹介にあがりました」
「ご苦労。雪那」
「――っ！お言葉、有り難く頂戴いたします。　沙耶香」
「はい」
高津雪那に促された少女が、歩いて折神紫の前に立つ。その身体は細く、華奢で、表情が無いというよりは他の表情を知らないといった無貌さだなと、燕は思った。
・・・え？ていうか居たんだ。
少女の存在感の無さを一瞬感じたが、燕がその歩き姿立ち姿を見て取った時、それはすぐに霧消した。
「中等部一年、糸見沙耶香です。よろしくお願いします」
――出来てるね、この子。
燕は微笑んだ。
「この者は真の天才です、紫様。弱冠１２歳にして一刀流の腕前は並ぶ者無し。　我が鎌府の刀使達の中でも主力といって良いでしょう」
「ほう、一刀流とはな。北辰か？」
「忠明さんの方」

「忠明さん？」
燕が頭と言葉で？マークを表現した。
「…小野忠明殿。　日本有数の剣豪である伊東一刀斎が興した一刀流の正統後継者だ。
色々と分派したのが特徴的な流派だが、糸見は小野殿からそれを直に学び、ひっそりと守り継いでいる家の子なんだ。お前に似ている」
「家伝の剣法ってやつかあ……。　そういえば剣豪３の典膳さん強かったなぁ」
「私は一刀斎先生の方が好みだが。技も、瓶割刀も強かった」
「…仏真刀は多人数戦では最強の形だね。一人対一城の任務ではお世話になりました」
「対人戦では又四郎さんの剣が良かったな。無口な…それでいて剣の話となると饒舌な所もまた。いや、河上彦斎も中々」
「え、ウソ？　もしかして相楽のおばちゃんあのゲームやりこんでる？」
「答える必要は無い」
・・・眼を閉じて言う相楽結月。なので燕は一計を案じた。
「――――先生は」
「何だ」
「道場へは……もう、稽古にいらっしゃらないのですか？」
・・・・・・。
「正直、詰まらぬ」
「――――詰まりませんか」
「騒々しいですよそこ！　細かすぎて二人しか伝わらない物マネ選手権なら他所でやって下さい！」
この人は同族だなと、解った燕達であった。
「……沙耶香はかつて私が使った御刀・妙法村正に選ばれた刀使です、紫様。必ずや現親衛隊以上に貴女様のお役に立ってみせる事でしょう…っ！」
「頼もしいな。――――糸見」
「はい」

紫が沙耶香の眼を鋭く覗いた。鎌府の、そして高津雪那の秘蔵っ子。沙耶香は涼しげなというよりは、何も写さない顔で紫を見つめ続けている。

・・・内に秘めた熱に、未だ気付かぬ童子のように。

「君が御刀を振る理由は？」

「刀使だからです」

「剣法を修めている理由は？」

「刀使だからです」

「刀使になった理由は？」

「……、それは…」

燕は小さく失笑した。自分に当てはめれば全部下らない質問だったからだ。

それに答えられないなど、そんな奴は刀使どころか剣士ではない。

「……、探る為です」

「――探ると」

「私には何が出来るのか、何の為にここにいるのか。…刀使は人を荒魂から守る者。それは嫌でも他人に関わり続けるという事。　他人をよく知る事が出来れば、何かが見つかるかもしれない。それを探っています」

「…ほう。殊勝だな、糸見」

「常に自己研鑽を忘れない、沙耶香は稀有な子です紫様。　ですからどうか、五人目の親衛隊候補に是非とも……」

「考えておこう、励め」

「――有り難う御座いますっ」

雪那が綺麗なお辞儀をし、沙耶香は無表情のままぺこりと頭を下げる。一見感情の無い人形のように見えるが、紫にだけは熱が見えていた。何かきっかけがあれば、すぐに溢れ出すであろうその胸の叫び。

――とても心地良い心身。

「私はお前が気に入った。糸見沙耶香、期待している」

――計画は順調のようで何よりだ、高津雪那。

「はい」

揃ってくるりと回れ右を行い、退室の為に歩を進める。…彼女はいつか気付く事が出来るだろうか。
すぐ近くに探し物はあるという事に。
「――ねぇ、沙耶香ちゃん？」
「……？」
二人の為に出入り口を開けた燕は、沙耶香に声を掛ける。雪那は剣呑とした眼付きだが、今の彼女達の視界には入っていなかった。
「頑張ってね！」
もしかしたら後輩になるかもしれない少女に、にっかりと笑顔を向ける。
自分が何なのかを忘れるな、とでも言うように、右手で愛刀の柄の頭をポンと叩きながら。
「…うん」
糸見沙耶香は荒魂と退治した時と同じ眼付けで、無念無想の心で紫の部屋から退出した。

ブレイドアーツ　1

――その日の夜、ここ鎌府では刀使の出動が一度も無かった。
平和である事は良い事である。　しかしそれはほんのちょっとの異常でも起こったらなら、すぐにでも待機中の全刀使が何処にでも出張れるという事であり、
荒魂といった異常達にとっては、正に最強の布陣であった。
――少なくとも長である高津雪那が今、心底思っていられる程度には。
「…これは良い刀ね。無銘という話だけれど、気に入ったわ」
鯉口を切り、鞘だけを動かして刀身を露わにする。目釘を抜いて、刀を持つ左拳を小気味よくズンズンと叩いて柄を外す。
同時に鳴る、鋼と鉄が摩擦する音。ハバキと鍔と切羽が奏でる協奏曲。
鎌府の学長はこの瞬間が気に入っていた。
「……」
刀を手に持つ場所のあたり、茎（なかご）に開いている目釘穴という丸い穴を見る。二箇所開いている物もあるが、この無銘刀には一つしかない。　ここは柄と刀を繋ぐ大事な部分。
――過去に幾人がこうして手に取って見た事だろう。歴史を感じさせる黒い茎と、所々傷のある鎬（しのぎ）・刃部・刃紋。
この手で刀の拵え・装着品、いわば服と下着を脱ぎとった裸身の刀は、途轍もない美に満ちていた。　それはさながらアポロとダフネ。いいや、ミロのヴィーナスの彫刻と言って差し支えない。
「……」
・・・・昔は博物館などに置いてある刀剣が嫌いだった。
綺麗だとも思わなかったし、時には気持ち悪いとさえ。
所詮は人を斬る為の道具。殺人包丁。
刀使だ何だともてはやされた時分もあったが、刀剣を振るって『術』

を扱うという事は、それは少女を人殺しにジョブチェンジさせる工程であろうとも。
「……」
だがそれも、ある日こうして刀を?き出しにして細身の裸身を眺めた時に変わった。
今でもはっきり覚えている。　当時の愛刀・妙法村正の一糸まとわぬ姿を、こうして眺めたあの日の事を。
――何事も自分の手で行なって、そして見てこそ本質が解ってくるものなのではと。
「……」
刀身に打ち粉を振り、拭って油を差してまた拭う。
逆の工程を介して凄絶なる美しい裸身に下着を、外着を着せてゆく。最後に柄頭を手のひらで叩き、パチリという締まり音を響かせた。
目釘を穴に入れ直し、叩いて引き締める。茎と柄が合致したのを確認して数回素振り。そして最後に刀を元の鞘へと納める。
そこには不備なく、万全な『拵え』の日本刀があった。
「――誰?」
声を上げる。　元歴戦の刀使である高津雪那は、さっきから部屋の外で誰かがじっとこちらを窺っている事を分かっていた。
・・・一度培った技と体と心を、剣士は死んでも忘れない。御刀を振るい、荒魂を祓い、人を守ってきたあの日々も。
そして、守られてばかりだったあの頃を。
「……、何の用だ」
脱力しながら、雪那は入ってきた人物と相対する。…ここで悲鳴でも上げて全身を強張らせるようなら、馬鹿である。　フードを被って顔が見えない眼前の『敵』もまた、それを知っていた。
「――写シ」
刀使だけが使える技能に、『写シ』と呼ばれる物がある。
全身をエネルギー体に変えるこの技は、たとえ全身がバラバラに吹き飛ぶような攻撃を受けたとしても命を失う事は無い。

どのような攻撃も僅かな痛みが伴うだけで、実体には何の影響も損失も無いのだ。
強靭な精神力を持っていれば何度攻撃を受けようと、この『写シ』が剥がれる事は無い。
・・・『絶対防壁』。若い頃に雪那達刀使はそう言っていた。それを今まさに、敵は使用している。
そしてそれは戦いの合図であった。
「…――――ッ」
雪那は食いしばった歯の間から、風切り音を発生させた。同時に刀の柄に利き手を走らせ、右足を踏み込み、左斜め上から右斜め下。敵の顔めがけて抜刀する。
すなわち抜き打ち。
抜即斬、居合術である。
「……」
斬るというシステムに万全の『拵え』をしてあるこの一振り。敵は刀を抜こうとした瞬間の硬直を捉えられ、無残にも顔面を斬られる。

筈が、後退することでそれを何とか免れた。
そして雪那の狙いは、そこにあった。
「……・・・!」
抜刀の勢いそのままに、刀を両手で中段に構えて、敵の水月（鳩尾から指三本下辺り。押すと超痛いし胃等があるので注意）を突く。
これは元よりそういう居合・抜刀術。隙を生じぬ二段構え。　左手という支えを失った鞘の落下音が、雪那にはどこか遠くに聞こえた。
それは勝利の音だった。
「……ッハ――――ッ!?」
学生の時分によく聞いた音。美術だか技術だか図工だかの授業中ハンマーで釘を叩く時、よくこんな音を聞いたのを想い出す。
ただ今回の釘は己の後頭部。　ハンマーは――――、
「馬鹿な――――ッッ!」
身体を力ませながら、雪那は見た。確かに見た。

それは鞘であった。
こちらの抜き打ちを右足を一歩後退して躱し、その足を軸に斜め前に踏み込みながら、雪那の両手突きを刀の柄で捌く。
死に体となった雪那の身体の横に移動した敵は、鞘による当て身を後頭部に叩き込んでいた。
・・・それはさながら受け流しの魔技。
相手の勝機を『眼』で捉え、『足』を使い、『胆』を練り、『力』を加えて実行する。
踏み込みという運動エネルギーと、突きをいなした事による後の先の勝機。これらでもって、敵はただの鞘の当て身を『不可避の一撃』と成す。
「――――……ッ」
――月日が経ち、愛刀の御刀に拒否され、全国にたった五箇所しかない刀使訓練学校の一つ、ここ鎌府の長になった時。…雪那は剣を遠ざけようと考えた事がある。自分はもう剣士ではなく、大人として職務を全うしようと思ったからだ。
だが結局雪那はそれを遠ざける事も、剣の鍛錬を止める事も一度として無かった。
刀使として御刀を振るう事はなくとも、自身にとって刀とは特別な物である事に変わりはなかったからだ。
「…だって、わたしは。　わたしはあのお方の御為に……」
幼き頃より姉として慕っている折神家現当主。あの方を守り、あの方の道を斬り拓き、あの方の傍に居る。
あの日からずっと、ずっと。ずっと。決して止まる事なく。
「紫お姉さま……っ」
剣士には剣を振るう理由ではなく、何かを守る理由が必要だ。だから高津雪那は剣を持ち続けている。そう信じ続けている。
・・・だから、倒れ伏せ意識が無くなるその前に、
「だから私はッッッ!!!!」
雪那が刀を横に薙いだ。　『写シ』を張っている、つっ立っているだろう敵のこめかみ目掛けて。

倒れてはいられない。止まってはいけない。あのお方の為にも。
自分の為にも。
――御刀が無くとも、わたしはお姉さまの刀使なのだから。
「――。・・・・・、！」
その時見えたのは、しゃがみ込んだ敵の頭。感じたのは己の水月に衝撃を与えた鈍い感覚。
「…お、前……」
フードが取れる。顔が見える。
そして弧を描く月が、今そこに――
「――愉しかった 」
意識を失うその時、高津雪那は全てを悟ったのだった。

中編

「高津学長はご無事なのですか」
明くる朝。朝日のようにズイと、顔を寄せる。
居ても立ってもいられない、鬼気迫る皐月夜見がそこにいた。
「落ち着きなさい夜見。　折神家当主親衛隊の者がうろたえるなど、あってはならない事ですわよ？」
「……私は冷静です」
そっと顔色を窺う。今もベッドに伏せているその人の。
今の夜見にとっては他には何も、高津雪那以外誰も見えなかった。
「そう言った人に限って、冷静とは程遠いものですわね…。
高津学長に切り傷は無し。外傷は後頭部と水月の打撃のみで、今は気絶してるだけですわ」
「おばちゃんは凄腕みたいだし、真剣を持ってたらしいから犯人さんは負傷してるんじゃないのかな？すぐに捕まるよ、大丈夫だって夜見おねーさん」
親衛隊第二席・此花寿々花が夜見に説明する。同じく第四席の燕結芽もまた、夜見を安心させる為に言葉を繋いでいた。
「どうやらその線は無いようですわよ、結芽。　学長の刀を調べましたが、何かしら物体を斬った痕跡は無し。……つまり」
「犯人は、真剣を持った元刀使に対して抜刀する事無く倒せる程の剛の者。　という事ですか」
寿々花が黙して首肯した。
「？　て――あれ？そういえば真希おねーさんは？」
「……獅堂さんは犯人を追って返り討ちにあったと、今朝親衛隊直属の綿貫さんから報告がありました。今は別棟の病室で寝ていますわ」
「！　親衛隊第一席の獅堂さんまでですか？敵は一体何者……」
その時カツンと、音が聞こえた。
「ん～～？　という事はさあ、寿々花おねーさん」

「何ですの？結芽」
刀の鍔に、爪を立てた音。
「折神家のお膝元である鎌府のトップが襲われてさ？　私達親衛隊の第一席もやられちゃったって事はつまり～～……」
眼球を上へ、そして正面へ。ミシリと鞘が鳴ったのは――――、
「私達と紫様。　ナメられてない？」
「……」
「――――そうですわね」
・・・三人分。
「今回の件は親衛隊預かりにせよと、紫様からのご命令ですわ。つまり私達で解決出来ない限り、今後親衛隊の名は名乗らせないという事」
「紫様は優しいけど、甘くも無いし身内贔屓もしないしね。フッフーン！」
「参りましょう。我らが王の庭を土足で汚した不届き者を、教育してさしあげなくては」
「ええ」
折神家当主親衛隊。　それはこの国で最も強い刀使の集団という意味である。

◇

鎌府女学院にいる刀使に聞き込みを行った親衛隊であったが、不審人物の目撃情報は皆無であった。
昨夜は荒魂の出現も無く、刀使は皆待機中であったとの事。世界は平和が一番。なべてこの世は事も無し。
――――疲れと憤りで小腹が空いた親衛隊の三名は、鎌府最寄りの蕎麦屋に来ていた。
「……手がかりは無しですか。　流石に尻尾をお出しになりませんわね」
「折神家お膝元の鎌府の長を襲撃し、無事逃げおおせた相手です。厳

しいのは承知の筈」
「…分かってますわ」
「いらっしゃいませ～。　ご注文は？」
「ざる蕎麦を一枚」
「キツネ蕎麦を頂けます？」
「冷やしタヌキ！」
「――――……、」
　蜂でも見たのか。　注文の品名をメモしている店員の動きが、ピタリと止まった。
「ん～??どしたの店員のおねーさん。注文は以上だよ？」
「店員さん？何か問題がありまして？」
　無言で燕を見つめ続けている女性店員。だが次の瞬間堪えきれないとばかりに肺の全空気を噴き出して、店員は破顔した。
「ップ!!!!　お客様、冷やしタヌキとかいう冒涜的で反人類的な食べ物は、ウチでは扱っておりません。未来永劫」
「え～～!!何で何でーー!!?」
「ご注文は以上でよろしいでしょうか？」
「見事な営業スマイルですわ…」
　女店員が笑みを浮かべる中、皐月夜見が燕に向かって少し顔を寄せた。
「燕さん、普通のタヌキ蕎麦ならありますよ。これは実に美味しいので、お薦めです」
「え～？う、う～ん……。暑いけど、今日はタヌキ蕎麦な気分だし…。　じゃあそれで」
「畏まりました！ざる蕎麦キツネ蕎麦タヌキ蕎麦ですね。　少々お待ち下さい！」
　――それは曇り無き笑顔だった。
　先程の営業スマイルなどではなく、店の味に絶対の自信を持つ者だけが放てる強者の笑み。
　踵を返すその背中には、必ずや満足出来る物を出してご覧に入れると黙して語る、職人特有の芳香。純正のプロフェッショナル（仕事

人)。
寿々花達は、震えた。
「い、一体何が出るんですの?ここ、ただのお蕎麦屋さんですわよね?」
「うーん!楽しみだな〜」
「……」
寿々花と燕が思い思いに口にする中、夜見は目を瞑って何も語らない。
美味しい物を食べられるという嬉しさが、彼女をそうさせていた。
「…ところでさ〜、鎌府で調査してみて気付いたんだけど、証言のひとつも出てこないなんて逆におかしくないかな?」
「というと?」
眼を見開き、夜見が注視する燕がピンと人差し指を立てた。
「――夜中に侵入したって言っても、鎌府は天下の伍箇伝だよ?
刀使だって詰めてるし、少しぐらい誰かが見ていたっていう証言があってもいいんじゃないかなあ?」
「言われてみれば……」
「犯人は誰にも見られずに鎌府に侵入した。――ではなく、誰に見られても問題なかった人物。その可能性が高いと言うのですか?燕さん」
「うん!」
「成る程。正面から堂々と鎌府の門から入り、高津学長を襲撃して真希さんすら破ったと。では犯人は、鎌府の誰かということになりますわね?」
「お待ち遠さまー!ざる蕎麦とキツネ蕎麦、はじめにお持ちしました!」
「ありがとうございます」
「お待ちしてましたわ」
「私のはまだ〜?」
「もう時期出来ますので、少々お待ち下さい!」
蕎麦屋の女性が、足早に厨房に戻っていった。

「此花さん、燕さん。この事態、獅堂さんが目を覚ませば進展するかもしれません。……顔をはっきりと見ていれば良いのですが」
「親衛隊第一席である真希さんが簡単に負けるとも思いません。大丈夫でしょう。　良い機会ですし、このあと皆でお見舞いに行きましょうか？」
「いいね～！　真希おねーさん、一人で淋しがってるかもしれないし！」
「はい」
「決まりですわね」
「お待ち遠さまー！　タヌキ蕎麦お持ちしました！ご注文は以上でよろしいですね？」
「うん！」
「ごゆっくりどうぞー!!」
熱い蕎麦がテーブルに置かれる。
割り箸を手に持った燕の眼の前で、揚げられたばかりの天かすが、丼の中で〝ばちばち〟と音を立てて踊っていた。
「……」
「……、」
凝視しながら手を合わせ、ごくりと、喉が鳴る。
「――天かすは、冷やす物ではありません」
刀使の友達と一緒に食べた熱い蕎麦を、燕結芽は生涯忘れる事は無かった。

◇

鎌府女学院別棟の病室内。風通しの良いその個室に、刀使・綿貫和美は居た。
親衛隊直属の部下として、ベッドに伏せる獅堂真希の護衛の為に。
腰の御刀と同じく背筋を伸ばし、椅子に座る綿貫の長い髪をそよ風が揺らす。
…誰にも知られる事なく、そっと。励ますように、彼女の髪が頬を

撫でていた。
「――。皆様、御疲れ様です」
「綿貫さん。獅堂さんの護衛、ありがとうございます」
「いえ、とんでもありません」
　病室を訪れた寿々花達が、しなやかに椅子から立ち上がった綿貫と礼を交わす。
　異常が無い事を述べ、長髪の刀使は部屋を後にした。
「……中々の使い手のようですね。あの綿貫さんは」
「獅堂さんのお気に入りだそうですわよ？　加えて背は高く、手足も長い。刀使としても女性としても優れていますわね」
「獅堂さんが眼を掛けるのも頷けます」
「それにしても真希おねーさん、まだ起きてないね……」
「はい。医師の先生の話では、外傷は無しとの事でしたが」
　眠っている真希の呼吸が穏やかである事に、夜見達は安堵した。
「『写シ』を破られすぎたようですわね。ただでさえ真希さんは、『写シ』を張り直すことが得手では無いのに。……ほんと無茶をして」
　寿々花が真希の手を握った。　直情径行気味である、親衛隊第一席に絶対に負けないようにと再度心に刻みながら。
　追い抜かされて跡形も見えなくなる事など、決して無いように。
「ホントだよね!!　こんなにも心配してくれてる美少女がここに三人もいるのにっ！　真希おねーさん、起きてよー!!」
「今は寝かせておいてあげましょう、燕さん。親衛隊第一席としての重圧は、常日頃から相当な物の筈ですから」
「はーい……」
「では今度はもう少し視野を広げて探索をしてみましょうか。……ところで昨日紫様と謁見した糸見さん、あの子には誰が聞き込みを？」
「！　その方の証言はまだ聞いていませんでした」
「はーい！私ー!!」
　燕がグイと手をあげた。
「病院内では静かになさい、結芽。　それで糸身さんは何と？とりあえずは……――！」

その時、銀閃が迸った。察知した寿々花が自身の愛刀を左手で掴むその前に。
それは御刀であった。
「何事ですの!?」
「それは何の真似ですか。――――獅堂さん」
「……ッッ！」
身体を覆っていた掛け布団を跳ね上げ、獅堂真希が、昂然と顔と刀を上げていた。
その視線と切っ先の指した方角には、
「真希おねーさん、起きたんだ！」
一人の剣士が。
「『写シ』を破られすぎたショックでおかしくなりましたの？――真希さんッ！　同じ親衛隊の仲間ですら分からなくなる程に!!」
「落ち着いて下さい獅堂さん。貴女が御刀を向けている相手は親衛隊第四席、燕結芽さんです。彼女は我々の同僚で貴女の敵ではありません」
「……、違う…」
「私達、ずっっと心配してたんだよ？　今だって真希おねーさんを襲った相手が誰なのか探してるところなんだよー」
「……お前だ、結芽」
「え？何が？」
「僕と高津学長を倒したのはお前だ、――燕結芽ッ!!!」
真希の刀が燕の喉笛を、絹でも刺し貫かんといわんばかりに指し示す。
犯人は君。犯人はお前。
犯人が、この場の誰にも知られる事無く、薄く嗤った。

中編　ブラッド・スター

――ひとつだけ知りたい。

鎌府学長・高津雪那と、折神家当主親衛隊第一席・獅堂真希を打ち倒したその者には望みがある。

日々を漫然と生きていたわけではないけれど、叶えられなかった一つの願望が。

――理由を、どうか知りたい。

……世の強い剣士と戦えば、それが叶うのではないか？

何時でも何処でもこの世は森羅、見かけは当てにならない。戦わなくては何も見えてこないし知る事すら出来ない。

――理由を。ワタシに理由を。

だからどうか、どうかワタシに教えて欲しい。望みを叶えさせてほしい。

だから戦え、刀を抜け。

――ワタシと立ち合えッ!!

「……」

事件当日の夜。　折神紫の部屋の前で、その者は踵を返した。現代最も強い刀使はこの部屋の主らしいが、どうも戦う気にはなれなかったからだ。

やれば必ず、自分が勝つから。

結果が分かりきった勝負など立ち合いではない。それはただの処理である。

「――動くな。鎌府学長を討ったのはお前だな、侵入者」

足を踏み出すその者を、『弾指』の速度域にて己の間合に捉えた獅堂真希は、既に『写シ』を展開していた。

淀みも無駄もない心身はただ己が主の敵を斬る事のみに特化し、眼前を睨んでおそらく一生離さない。

・・・たまたま鎌府の研究施設に所用が有ったのが幸いし、真希は高津雪那学長襲撃をいち早く知る事が出来ていた。そして鎌府は折神家のお膝元。

ややもすれば、今度は己が主に危険が降りかかる。

真希は親衛隊第一席としてここに有り、眼前の如何なる敵も恐怖も全て斬り払うと腹を決め、御刀の柄に利き手をかけていた。

「……――――」

抜刀する真希の佇まい。それを、フードを被ったその者は刀を抜かずに見つめている。

「折神家当主親衛隊第一席、獅堂真希。――推して参るッ」

真希は気を吹いた。この世の普遍を凌駕する為に。

「……迅移！」

――刀使のみが使用できる技能に、『迅移』（じんい）と呼ばれる物がある。

それは彼女達人間から路傍の石ころに至るまで、普遍的に流れている時間を支配下に置く為の技法。

・・・身体を速く動かしているのではない。迅移の極意は今よりも早い時間流に乗る事。

１００メートルをいかに短時間で走れるかが『速さ』であるなら、１００メートルをいかに短時間で走りながらその間何が出来るかが『早さ』である。

たとえゴールタイムが同じであっても、どちらが勝るかは明白であろう。

――刀使である真希は、その早さを常人以上に会得していた。

刀使が『迅移』を発動すると、『穏世（かくりよ）』という此の世ならざる場所から力が刀使に加わり、己以外の全ての動きが遅くなる。

何故ならこの間（かん）、『早い』彼女達には何でも行う事が許されるからだ。　より速く走る事だって出来るし、逃げる事も戦う事も出来る。

「――神道無念流・我流」
そして平等普遍なる時の流れを、刀使だけはそれを早める事だって出来る。
既に地を蹴っている真希のように。
「……砂塵すくい！」
風をも逆巻く太刀筋は砂塵の嵐にも似て。左右に過ぎ去るそれが何を斬ったのかは、手に持つ刃の切っ先のみが語る。
「――――、」
真希だけの剣技を前に、フードを被ったその者は動かない。…いや、動けないのだと真希は確信した。
『迅移』を発動し、早い時間流に乗ったのは明らかに自分が先だからだ。
同時発動ならまだしも、後手では己と同じ時間流に相乗りする事は遅くなる。
・・・・何も出来ない。もうこの敵は、何も出来ないのだ。
「『迅移』」
だからこれはありえない。ありえない事なのに。
「――天然理心流裏、我流」
恐るべきスピードで砂塵を掻い潜り、迫る剣尖が一つ二つ。
いや三つ。
「お前、は……」
「バイバイ。オネーサン」
何もかもがあまりにも早い事による、男か女か判らない嗄れ声。幾度も幾度も刺し貫かれるその感覚に、獅堂真希は意識を根こそぎ奪われたのだった。

◇

「僕と高津学長を倒したのはお前だ、――燕結芽ッ!!!」
「そんな……。　結芽、貴女まさかっ」
「ち、違うよ！私その夜は部屋で寝てたもん!!」

「……燕さん」
　他ならぬ被害者である真希の言葉に、夜見は御刀を抜いた。　鞘から抜き放たれた穏刃が、音無しの構えとなって眼前を睨みつける。
「貴女が。　――――高津学長を討ったのですか」
「違うって！信じて夜見おねーさん!!」
「見間違いということは……、ありませんわよね。真希さん」
「ああ」
「顔は見たんですの？」
「フードで顔は見えなかったが、あの剣技とあの足捌き。僕が見間違うわけがない」
「ちょっと落ち着いてよ！　少し考えれば分かるじゃん、私が真希おねーさんや高津のおばちゃんを倒して何の得があるの!?無いじゃん!!」
「確かにそうですけれど……」
　口元に手を当てながら、寿々花は腑に落ちない部分を確かに感じていた。燕結芽は歳相応に幼いながらも、剣の腕は親衛隊随一である。
　単に腕試しがしたかった、とか何とか適当な理由で戦いをしかけたという可能性も無くはない。
　しかしそれならこんな闇討ちまがいの事をする必要も、わざわざ鎌府の学長を狙う理由も無い筈。
「単に腕試しがしたかったんだろう？　結芽!!」
「そんな子供みたいなことっ!!」
「子供だろうが!!」
「真希おねーさんだって!!!」
　寿々花が熱した二酸化マンガンの様にヒートアップする二人を止める為に手を伸ばした。
　まずは落ちついて取調べを行わなくてはならない。断罪はそれからでも遅くは無い。
「――――言い訳は、」
「!?　夜見さん…！」
「拘束した後に思う存分語って下さい――」

巧遅は拙速に如かずとは彼女の為に有る言葉。
夜見は『写シ』を瞬時に展開、同時、『迅移』を発動した。
「警察庁刀剣類管理局・特別祭祀機動隊の名に於いて。燕さん、貴女を逮捕します」
「証拠不十分で逮捕！・夜見おねーさんって実は熱い人だったの？　頭がっ!!」
音を置き去りにした御刀同士がかち合う。
西洋の大剣ならまだしも、こんな薄い刃同士をぶつけるなど、傍目ではとんでもない事であろう。
しかし一般的な刀と違い、刀使の持つ御刀は折れず曲がらず。
「私は冷静に職務を全うしているだけです」
「どこがっ!!」
ゆえにこのような『迅移』の最中の打ち合いにも耐え、巨大な荒魂をも斬り裂く事すら可能にする御刀は刀使の命であった。
「お待ちなさい、結芽！・夜見さん!!……まだ確実な証拠がありませんのにっ」
「寿々花。――仮にだ、仮に高津学長と僕に無傷で勝てる手合いが、結芽以外にいると思うか？」
「傲慢な！　真希さん貴女はその口を閉じていらして！」
寿々花が御刀を抜き、夜見と燕の間に入ろうと足に力を込める。
・・・止める理由は。　状況証拠しかないからだというのもあるが、一番は自身のカンだった。
この流れ、この雰囲気。寿々花は何か嫌な物を感じていた。
「強いね、夜見おねーさん」
「……」
時間を遥か彼方に置き去りにした、超越した剣戟の音と言葉だけが二人の戦場を震わせる。それはどこか、激しい祭囃子に似ていた。
「昔一度だけ立ち合った時より腕を上げたね。　練度が全然違うよ」
燕が『迅移』の段階を上げた。夜見の方も、全く同時に。
『迅移』には複数の段階が有り、高位のそれを扱う事は熟練の刀使であっても難しい。

・・・だが折神家当主親衛隊である彼女達には関係も、論も無かった。
「…早い」
「嬉しいから、ちょっと本気で斬るね」
燕が刀を右肩担ぎに構えた。跳躍して後退し、夜見の動きを探っている。
――と見せかけ、燕は突如前進した。
「突進技ですの……？」
寿々花は剣士として妙な胸騒ぎを覚え、停止した。それはこの燕の技が、どこか歪なものに見えたからかもしれない。例えるならそれは、料理をする際に塩と砂糖を入れ間違えるといった違和感に近かった。
・・・何かが欠けてる、何かが奇妙。
腰を落とし、刀を構えながらススと早足で進む燕。それに対して刀を右脇に構えて迎え撃つ夜見。
同段階の『迅移』を発動している両者にとって、勝敗を決めるのは互いの剣技と眼力のみ。
どんな攻撃をしてくるのか？どんな勝機・フェイントを狙っているのか？『迅移』の段階を上げるのか上げないのかそれとも下げるのか？
――刀使同士の戦いは、荒魂とのそれとは違って騙し合いである。
ブンっと長物を誰かに振るって思い通りに当たるのであれば、剣術など現代に残ってはいない。
「……」
岡目八目。寿々花は燕の剣技を、早足による心的重圧と間合の強奪であると直感した。恐らく彼女は最後、跳ぶに等しい大股の踏み込みで早足に慣れたこちらの眼を欺いて斬って来る筈と。
夜見は梟の如き瞳と構えで、変わらず燕を見つめ続けている。
「……ッ」
間合が狭まり、重なる。斬って斬られる生死の間が互いの影を食むように。

刹那、夜見は構えを右脇から中段に変え、燕を鋭く突いていた。
「なんと――」
寿々花は堪らず閉口した。　剣士として今のタイミング、今の機で構えを変えて突きを放つなど、自分の命を度外視している行為であったからだ。
もし燕が斬りかかっていたら、間違いなく夜見は為す術無く斬られていただろう。
――故に夜見は勝機を獲ったと寿々花は確信した。
百人の刀使が今のをやってみたとしても、百人が百人真似できないと即答できる。それは対峙している燕であっても例外なく――、
「……ッッ！」
――笑みを浮かべる。　弧を描いたそれは、自他共に認める歓喜の笑みだった。
「まさか、結芽。――貴女っ」
刺突は燕の身体を貫いて、などいなかった。
・・それは自らの方向を力強く変える馬の脚にも似て。　燕はバックステップで夜見の突きを躱していた。
そして今度は前進する事で体重移動の力をより一層発生させ、夜見の片腕を落雷の如く斬り捨てる。

――燕家家伝・『刈流』　奔馬。

「っッ!!!!」
「……ッ!?」
二人の刀使の呼気が部屋を響かせる。　一人は足腰に力を込める為に。
そしてもう一人は、貪欲に勝ちを引き当てようとする眼前の剣士の有様を見て。
すなわち。
――燕が夜見を斬った直後、夜見は残った片腕だけで燕をグイと突いていた。

「双方、そこ迄ですわ」
先手を貰って『写シ』が解けた夜見を、寿々花は守るように拘束した。
だが鋭い視線は燕に向けており、剣士の如何なる動作も逃さず応じ尽すという巌のような不動の闘気を纏わせて、親衛隊第二席・此花寿々花は口を開いた。
「――結芽、御刀を納めなさい」
「…先に抜いたのは夜見おねーさんだよ?」
「夜見さん、立ち合って分かった筈です。　犯人は結芽ではないと」
「…――――」
『写シ』を破られながら無理に動いた反動か、夜見は眼を瞑ったまま動かない。そうして眠ったように一呼吸、二呼吸。
次第に眼を開けて自身の腕をさする。斬られた箇所を、何度も。何度も。
そうして目線を、夜見は自身の腕から燕に移した。
「――はい。この燕さんは、犯人じゃありません」
「馬鹿な事を言うな!あの動き、あの剣技!!　…結芽以外に誰が居る!!!」
「とにかくですわ。昨夜のアリバイ等身の上を話していただきますわよ、結芽」
「しかたないかぁ。…ま、すごく良い立ち合いも出来たし、私の身の潔白を証明してあげてもいいよ!」
「寿々花ッ!!!」
怒声が飛ぶ中、夜見と燕が同時に御刀を鞘に納めた。
「直情径行なのは相変わらずで安心しましたが、貴女はまだ病み上がりのようですわね獅堂さん。貴女は夜見さんと共にここで休んでいらして。　…立ち合いの後で申し訳ありませんが、獅堂さんの面倒をどうかお願いしますわね。夜見さん」
「はい」
寿々花と燕が病室を出る。

真希は自身のベッドを拳で叩いて、底知れない屈辱と己の力を誇示した。

◇

・・・犯人は親衛隊第四席以外にいない。

それを完璧に立証する為、真希は頭を捻って考えを纏める。

自身の目撃証言とあの剣技。　そしてあと何か一つで、事は足りるだろうという思いと共に。

あんな人智を超えた剣を使えるのは、彼方に遠いあの子しかいないのだから。

「結芽がどんな理由で僕と高津学長を襲撃したのか、その目的は何なのか。――時間の問題だな、夜見」

「ええ。　しかし獅堂さん」

「何だ？」

冷蔵庫に入っている水枕を、夜見は触り慣れた手付きで真希に渡した。

「黒幕がもし居るとしたら、如何しますか？」

「黒幕だって？あの結芽が誰かに唆されたって言うのか？　それはありえないな」

「――？」

「アイツは折神家当主親衛隊第四席。最強の刀使・燕結芽だ。誰かに側に付くなんて、プライドが許さないだろう」

「随分と信頼していらっしゃるんですね？」

「アイツは僕の目指す背中だからな。…信頼というより、そうあって欲しいだけだ」

渡された枕を首に当てる。ひんやりとした空気が真希の鼻を通って、脈打つ頭と肺を鎮めてゆく。

「――しかし。あの子はそんな高尚な存在ではないですよ」

「…ほう？随分と辛辣だな、夜見。　高津学長と僕を討った事がそんなにも許せないか？」

「いいえ。ただ燕結芽には望みがあるんです。それは唯の一つ――――戦いです」
「戦い？」
「ええ。刀使としてではなく一人の剣士として、燕結芽としてどうしても。戦っていたかったんです」
「……、それは誰と？」
「強き剣士と」
　真希の左手が、スイと御刀に触れる。
「強い剣士と戦い、自身が此の世にいた理由は何なのか。ただそれだけを知りたかった。――――いえ、知りたい」
「……。…ほう？」
　自身の荒魂を開放する。二つの瞳が紅く拡がり、真希は今やこの場に居ない一人を除いてこの世の刀使の誰よりも身体を上手く動かせるだろう。
「ねえ獅堂さん。剣を振れる時間が少ないという事実が、おねーさんに分かる？」
「……」
「日に日に痛む心臓が、肺が、嫌でもワタシにタイムリミットを知らせてくる。まだまだワタシは刀を振りたいのに。
――誰よりも誰よりも誰よりもっ!!!!――――戦いたいのに」
　見覚えの無い。いや、ひどく見覚えのある表情を眼前の誰かは浮かべている。
　それはまるで弧を描く、血に濡れた月のよう。
「夜見。…お前、」
「こっちの高津のおばちゃんは良かったよ。それに引き替え紫様はあっちでもこっちでも駄目駄目。　あんなの刀使でも剣士でも何でも無いんだもん」
　静かに、鯉口を切る。
「……、誰だ」
「ああそうそう、最後に教えといてあげようか。御刀を介して刀使が力を引き出してる、『穏世（かくりよ）』について。

――あそこはね、時間や空間の概念が無いんだ。ありとあらゆる可能性を秘めてて、その可能性に行く扉も有るんだよ。ワタシがこうして、こっちに来れたように」

御刀を抜く、その前に。

「お前は誰だ……皐月夜見ッッ!!」

「嫌だなマキおねーさん、判ってるくせに。　ワタシは折神紫親衛隊、」

第四席。

と、小さな唇が動いた。

「――ツバクロユメ。四席って言っても、一番強いけどね？」

真希が『写シ』と『迅移』を発動する。右手を柄に飛ばす。・・・・

それらの遥か前に、

「――っグ、ふ……!?」

真希の水月には、柄の当身が奔っていた。

「相変わらずここでも詰まんないね、おねーさんは。でもこれで舞台は整ったかな。――夜見おねーさん、また身体借りるね」

……これが最後だから。

そう呟いたその者は、瞳を閉じて呵々と嗤う。

此の世ならざる魔戦士が、今ここに再臨していた。

後編

・・・・この世の裏側には『穏世』（かくりよ）と呼ばれる世界がある。

それが分かったのは、刀使が『迅移』を使用した時であった。

刀使曰く、どうもそこはこの世以上に時間流が早い場所らしく、『迅移』を使うとそれをこの場に引き出す事が出来るのだと。

――――他人には分からない、早さという漫然とした感覚。ではその場所・『穏世』とは一体何なのか？

その解明の為、その昔『迅移』を行使し続けた刀使達の実験の元に、現代では三つの事が分かっていた。

1、穏世は幾つかの層に別れている事。

2、層が深ければ深いほど時間流が早い事。

3、最深部の層に至ればこの世にはもう戻ってこれない事。

そして、

「――そして４つ。穏世の最深には、他の世界への扉が有る事」

「……それは初耳ですね」

「ワタシがそれを見つけてここに来れたんだもん。知らなくて当然だよ」

そこは奇妙な空間だった。

声は響き、眼は見える。だが夢と現が混ざったような、この世とあちらの境のような朧な空間。

自身が眠ると決まって訪れるここを、夜見は幼少の頃から知っている。名前も知らない眼前の少女との出会いもその時から始まった。

・・・ここでの記憶は、目覚めたら何も憶えていないようだが。

「…貴女は違う世界の燕さんなのですね？」

「うん、そうだよ。折神紫親衛隊第四席・ツバクロユメ！　ワタシが居た世界と夜見おねーさんの世界はだいぶ似てるけど、親衛隊の名前とか少し違うところが有るみたいだね」

聞けば彼女、ユメの居た世界では折神紫親衛隊で、この夜見の居る世界では折神家当主親衛隊。そしてユメが知る皐月夜見はそんなに強くなかったらしい。
「…恐らく、そちらの私は貴女とここで稽古していなかったのでしょう」
「そういう世界線かぁ――、面白いね！」
「……。ユメさん」
夜見は稽古に使っていた御刀を鞘に納め、瞳の中に少女を映した。
「貴女は。……、貴女は故人ですね？」
「――うん」
少女は瞳に何も映さずに頷いた。
「よろしければ、話して下さい」
ユメは自身の最期を話した。病に侵され、失意の中で死んだ身の上を。　病のなか誰かと戦って誰かを追って、木の下で死ぬ間際に最期の力を振り絞り『迅移』を発動した事を。
・・・・気付いたら真暗な世界。
長い間彷徨ってここは穏世だと悟った時、眼の前には扉があったという。
「そんでくぐってみたらちっちゃな夜見おねーさんが居て。――寂しかったから、嬉しかった」
寂しさを埋めるように、ユメは夜見を鍛え始めた。
夢のようなこの場所での記憶は目覚めれば消えてなくなる。
だが剣士ならば、鍛えた体と技を忘れない。そうしてこの世界の夜見は、ユメが知る彼女よりも数段強くなったのだった。
「貴女は私の師匠だと。そう思っています」
「ありがと。まあ、――実際の所はワタシの望みの為でもあるんだけどね」
ユメは言う。自身には叶えたい望みがあった、あったのだと。
・・しかしそれは一体何なのか。それだけが思い出せなかった。それはここに来た時から、ずっと。
「戦えば思い出せそうなんだよね。――でも、」

「私では、もう不可能だと」
「――ごめんね。夜見おねーさん」
眉根を歪ませて小さく笑みを浮かべる。
自身の目的が何なのかは知らないが、こうして貴女を鍛えるのも悪くない。　ユメがそう納得させ続けている事に、夜見は気付いていた。
「……貴女は顔に出やすいですね。そこは私の世界の燕さんと変わりません」
「そういえばそっちのワタシ、強いの？やっぱり」
「強いです」
皐月夜見が断言する。このツバクロユメの一番弟子が。
「――へえ？　他に強い剣士は？」
「あとは私に御刀を与え、親衛隊に取り立てて下さった高津学長も強いですね。獅堂さんと此花さんも無論ですが」
「ああ、おねーさん達はいいよ。純粋な剣士だけを知りたいから」
「…はい」
「でもいいな～、夜見おねーさんは。そんな世界で立ち合えるんだもん。――羨ましいよ」
「羨ま、しい？」
「？　うん。戦えるんだもん、いっぱいいっぱい。良い事だよ」
夜見は思い付いた。眼前の師が、何を望んでいるのかを知る方法を。
嗤っている、このツバクロユメの願望を。
……師匠。――私は。
「ユメさん。　一つ、試してみてもいいですか」
「なあに～？　……おねーさん？」
夜見が御刀を構えた。
「生きる人として、刀使として。私は職務を果たします」
言葉の終わりに夜見が感じたのは、自身の腹部に奔る銀刃の熱さだった。

◇

「――う～…ん？　ここはどこかな？」
そこは剣道場のようだった。板張りの地面と、檜といった木材の匂い。
・・・寝ていたのか。起き上がり、そして懐かしい生身の感覚が嫌でも自身を覚醒させ、あちらに居た記憶を思い出させる。
「ああ、思い出した。ここ折神家の修練場じゃん。――もう、あの夜見おねーさんめ。そういう所はあっちもこっちも変わんないんだから」
刀を己の腹に突き立てた馬鹿弟子は眼だけ笑って、最後にこう言ったのを思い出す。

『どうか存分に。本懐を』

「――。あっちで自分が切腹すると、相対している他人がこっちに来れるだなんて。ご都合主義もいいとこじゃん」
悪態をつく、皐月夜見の外見をしたツバクロユメ。しかしその顔に浮かんでいるのは笑顔だった。
「ありがとう、おねーさん。　さてと、じゃあまずは、」
恐らくここで自身が眠れば、弟子である夜見は眼を覚ますだろう。あちらで自分が何をしたのか憶えていない、いつもの彼女に。
その事に、ユメは少し安堵した。
「――鎌府に行こうか。高津のおばちゃん、強いんだってね」
現実世界の空気を吸い、踏みしめた地面を音も無く摺りながら、一人の剣士は戦場へと向かう。全ては、己の望みを叶える為に。
・・・そして今。
高津雪那と獅堂真希を打ち倒したその者、ツバクロユメは、本人から事前に聞いた携帯電話の暗証番号を入力し、ある人物にメールを打って待ち続けている。
あの場所で。

・・・呼吸をすれば、ここはあちらもこちらも変わらないのだと実感する。不変の風と草花の薫りが彼女に高揚を与え、無い筈の胸の痛みが、癒えない病のように後悔という名の創痕を蘇えらせ続けている。

「――愉しいね」

吾の宿りは　誰か知る。

刃を鳴らす。

自身が散った、あの場所で。

◇

「?、これって……」

「結芽?どうかしましたの?」

鎌府の取調室に寿々花と共にきた燕がようやく開放されたのは、太陽が傾いて橙色の閃光が彼女の眼を翳した頃だった。

疲れをほぐそうと上半身をグイと伸ばしたその時、燕の携帯電話にメールの着信が知らされる。

「夜見おねーさんからメールだよ。　…敵の正体が分かったから、この場所に来てくれって」

「ッ!　他には何と?」

砂時計の中の砂が落ちるように。

ゆっくりとゆっくりと、綺麗な斜陽が彼方に沈んだ。

「ええと、……真希おねーさんの容体が急変。傍に付いてあげてって」

「なんですって!?」

「どういう事かな…。何かおかしくない?」

「おかしいもおかしくないも無いですわ!恐らくあの後病室で何かがあったのでしょう。　私は獅堂さんの病室に行きますので、結芽は夜見さんの所へ!!」

寿々花が居ても立ってもいられずに疾駆した。その様を見て、親衛隊第一席と第二席は非常に強い友情で結ばれているのだなぁと燕は

思う。
「りょ～か～い。　…ってもう聞こえないか。ええと、夜見おねーさんがいる場所は……」
――折神家本邸・祭壇前。欅の木の下。
燕は何故か昔から、その場所が嫌いだった。

◇

「綿貫さんッ!?　これは一体……」
真希の病室を再度訪れた寿々花が見たのは、ベッドで苦しげに眠っている真希と、椅子に座っている綿貫和美だった。
「申し訳…ありません、此花様。私では真希様をお守りするのが、やっとで。あの方を、止める事は出来ませ――、ッ」
「無理をしてはなりません！　…ゆっくりとで構いません、一体何があったんですの？」
綿貫にはこれといった外傷は無し。
しかし息も絶え絶えなこの消耗の激しさは、刀使であるならば誰しも体験した事見た事のある姿だった。
「犯人が、分かったのです……っ」
「！　ええ」
「真希様を討ったのも高津学長を討ったのも、全部あの御方の仕業だったのですッ」
・・・彼女は『写シ』の状態で、何度も何度も何度も斬られたのだ。
寿々花は綿貫の背中をゆっくりと擦って落ち着かせた。
「その犯人とは？」
「皐月……夜見様です」
瞑目し、片手で綺麗に整った髪型を歪ませる。苦々しく綿貫が口にしたそれは、髪が歪んだ寿々花にとって有り得ない事だった。
綿貫に気付かれぬよう、ナースコールを押す。
犯人は折神家当主親衛隊・第三席。そして自身をここに寄越したのもまた彼女。

犯人は昼時に三人一緒に蕎麦を食べた、あの彼女。
「――嘘、でしょう…？」
「残念ながら事実です。私が真希様の様子を見ようとこの場に来た折、……皐月様は真希様を襲っていました。親衛隊直属の名に掛けて、私はこの刀を振るいましたが……力及ばず」
「そう。……そう、でしたの」
――彼女の言に嘘はない。
いつも綺麗な綿貫の長髪がひどくうねりを打っているのを、寿々花はこの日初めて眼にした。戦いの激しさを悟るにはそれだけで充分過ぎて、自身の頭が急速に冷えてゆくのを寿々花は自覚する。
・・・恐らく彼女は、自分は『写シ』を張っていたから大丈夫だと治療を突っぱね、傷付いた真希を診てほしいと病院側に言ったのだろう。こうして寿々花が来るまで、ずっと一人で。
「至急お医者様と代わりの護衛がここに来ます。　貴女はどうか安静にしていらして」
「……申し訳、ありません、此花様」
「貴女は刀使として充分責務を果たしましたわ、綿貫さん。貴女に感謝と敬意を」
深々と頭を下げ、座ったまま気絶する綿貫を眼に宿し、医師と入れ違い様に病室から出た寿々花は携帯電話使用可能エリアに入ると、方々に連絡。　じきにここは警戒態勢がしかれる事だろう。
「…もしもし、結芽？」
『なあに？寿々花おねーさん』
「一連の犯人が誰か、分かりましたわ」
『夜見おねーさん？』
「ええ」
知っていたのか。　とは聞かなかった。
「貴女、今何処に？」
『折神家本邸。今は祭壇に向かって歩いてるよ』
「紫様はご無事ですの？」
『さっき執務室で会ったよ。異常なしだって』

「そうですか。――――結芽」
『なあに？』
静かに息を吸う。彼女は他の誰でもない燕だけを指名し、場所を指定した。
それすなわち、彼女の狙いは――
「夜見さんを祓いなさい。親衛隊第四席刀使・燕結芽」
『了解。後はよろしく』
通話を切る親衛隊第二席刀使・此花寿々花。
直感だが、あの皐月夜見は敵であるが敵ではない。まるで荒魂と対峙している時のような感覚が、先程から寿々花を震わせていた。
「信じてますわよ、結芽。夜見さん」
信頼している仲間が何かに変生した時それを祓うのは、他ならぬ我らの仕事なのだ。

後編　ソードソーサラー

彼女が振り返る。燕が見る。
その姿形は昼に別れた刀使の先輩である事に間違いはない。
浮かべている表情と瞳が一種の異質さを醸し出している点を除けば、彼女は皐月夜見だった。
「やあ」
気安い挨拶。
燕はそれに、ん、と頷いて返した。
「やっと逢えたねー。早速なんだけどさあ」
「……」
「何する？」
それを聞いて、燕は軽く指で柄頭を打った。
――見て分かる。彼女は皐月夜見ではない。　昼時に蕎麦を一緒に食べた友達などでは、断じて。
風が巨木をさやかに揺らし、舞い上がる葉が二人の間にゆらゆらと落ちる。それは両者を違える絶対的な差となって、剣士二人を熱烈に歓迎した。
それを。　皐月夜見の姿をした剣士は音も無く踏みにじった。
「だよね！　――はじめまして燕結芽。ワタシは異世界の、違う時空の天然理心流剣士・ツバクロユメだよ」
世迷言を口にする眼前の誰か。
夜の闇が揺れる陽炎となって、とうに過ぎ去った筈の逢魔が刻を喰らい尽くして更なる強魔を顕現する。
しかし彼女は幽霊にあらず、生霊にあらず。
刹那に過ぎ行く閃光のように何処かの世界、何処かの時間で、最強という華を持ち続けた一人の魔戦士。其の名を――――、
「ところでさ。――君、心臓は？」
「……」

首を横に振る。
「肺は？身体に異常は？」
「無いよ」
一時期は痛い頃もあったが、日々の修練がそれを無くした事を燕は告げた。
「そっか。じゃ、やろっか」
では加減は必要ないとでも。それで及第点だといわんばかりに。天然理心流剣士・ツバクロユメは抜刀した。
「――――っ」
知らず、息を呑む。それは凄絶な表情だった。
刀を抜き、無言でこちらを見やる女が、ただ笑う。嗤う。
この時を待っていたのだ。この時だけをずっとずっと望んでいた。渇望していた。
待ち望んでいた。
吾が望みは強い者と立ち合い、己の名と存在を癒えない創痕の様に残し続ける事。・・・ワタシは思い出した。だから忘れるな。
忘れるな。
ワタシの名前はツバクロユメ。
お前を倒し、かつてこの世の刀使・剣士の頂点に立った女だ。
「……ッ!!!!」
意をとった燕が抜刀し、間合を図る。
天然理心流の剣士は竹刀や木刀ではなく、真剣での戦いでこそ真価を発揮する。

――――尊王と攘夷を胸に宿す羅刹達が跋扈した幕末の時代、そこに『新撰組』という現代の警察組織の前身ともいうべき集団がいた。
袴に二刀差し（時には槍といった長物も振るったが）、素肌剣法を主眼としたその剣士達は、史上空前の大動乱の京において数多の剣客を薙ぎ倒し、古今無双の剣集団として雷名を打ち立てた。
・・・何故かくも、ただ人斬り包丁を手に持っただけの彼らにそんな事が出来たのか。

一説によればそれは、『池田屋事変』という事実があったからだという。

・・・京を紅蓮の炎で焼き尽くし、混乱に乗じて天子様を他藩に連れ去るというこの暴挙の鎮圧の魁は、池田屋に踏み込んだ数名の新撰組隊士達であった。

計画を練るため旅宿池田屋に集った攘夷志士。　自国を憂い、祖国の未来をより良きものにしようと前を見据え、一心不乱に駆け抜ける事こそが己の宿命と疑わない者十数名。

新撰組の頭、局長・近藤勇はたった三名の剣士だけを連れてその池田屋の敷居を跨いだ。

・・・・電灯もない、ただの月明かりだけで充分明るいと伝わる当事の深夜である。

狭い屋内戦闘の火蓋が切られようとしていた。

異変に気付いた攘夷志士達は睨みを利かせ、敵が押し入ってくるであろう部屋の襖に注意を払った。

――祖国の未来と安寧を邪魔する者は斬る。

・・・余談だが、この戦いで死亡した高名の攘夷志士達は後に殉難七士と謂われる事となる。

近藤勇は襖を蹴破り、人の心臓を停止させるか声色で言った。

『御上意である』

上意とは将軍の命令であり、武士・侍にとっては絶対遵守の命令である。

『手向かい致すにおいては、容赦なく斬り捨てるッ!!』

志士達は刹那、動きを止めた。時代を生きてきた本能である。　だがそれを、左手に持つ刀の如き鋼の理性で忘却の彼方へ。

その場の全員が同時に、刀の鍔を押し上げた。

――闇夜の戦闘が始まった。

近藤勇を含め四名の隊士の内、半数が天然理心流の使い手であったが、残る二人は神道無念流と北辰一刀流。

皆危機は幾度か合ったものの存命。

だが神道無念流の剣士は親指を、北辰一刀流の剣士は額を斬られる

事となった。
対して天然理心流の剣士二人、近藤勇と沖田総司は無傷であったという。
そして別働隊である他の隊士達との合流もあり、新撰組側は総勢数十名で敵の殺害及び捕縛に成功。
結果死者三名で攘夷志士の企みを阻止したのだ。
・・・斬り合いという生死の狭間が明確に、己と相手という形で眼に見える修羅場。
そこにあって天然理心流剣士にして新撰組隊士、近藤勇・土方歳三・沖田総司・井上源三郎らは確実に敵を殺傷するこの剣を振るいに振るい、斬り合いの中で斬殺される事無く時代を最期まで駆け抜けた。
その歴史ありて古今無双の集団と剣名は生まれたのだ。

「……ッッ！」
横に寝かせた刀の切っ先が、こちらの肺を狙う。
燕が御刀の鎬で弾くと、瞬間、敵の刀はまるで手のひらを返すようにこちらの御刀に乗っかり、首めがけて加速した。
天然理心流裏・我流、平突き。
「――――!!!!」
燕は足を動かし、首を振る体捌きで回避する。
「えいっ」
しかし読まれていた。
ユメはその場で回転。足を引っ掛けて燕を転ばすと、刀を逆手に持ち変え敵の心臓めがけて突き下ろした。
――とにかく今は距離をとるべきだ。
いかに『写シ』があろうとも、身体に残り続ける異物には対応できない。
それゆえに、突き技は刀使にとって天敵であった。
「……邪魔っ！」
『迅移』を発動。通常の時間から逸脱し、普遍的に、敵にも流れている普遍的な時間流よりも一層速い時間流に乗る。

何段階かある『迅移』だが、今の燕の迅移は2段階目。
通常、『迅移』は自動車のシフトギアのように1、2、3と順番に上げる事しか出来ない。
だが燕は修練によって最初から2に入る事が出来ていた。
これを前にしては流石の敵もスロウに、
――――スロウに、
「……ならない!?」
嘘でしょ!!?
「ホント」
天然理心流裏…我流、奥義の参。
「――――射抜」
曰く、天然理心流宗家五代目を継ぐ筈だった剣士は、一歩で三本の突きを放ったという。
腕を引いて伸ばせば突きは撃てるが、それだけではただの棒振り芸であって剣術ではない。
前進による体重移動力で一撃目を為し、前足を踏み込んだ事による体重の沈み込みの力でもって二撃目。
・・・両手を伸ばして壁に手をついたまま膝を曲げて体重を落とすと、腕は更に壁を押す事が出来る。それを利用した二撃目の突きを相手が退いた所へ、
後ろ足を前足に引き付ける事でもって三撃目を為す。
――――眼前の敵はそれを3段階目の『迅移』で成し遂げていた。
風の噂で、世の中には最初から3に入れる者がいるそうだが、燕はそれを使える剣士に会った事は無かった。
この日までは。
「あれれぇ～？　おかしいなあ」
「……」
「貫いたと思ったのにな。――――今の動き、天然理心流っぽくないよね？」
「……」
・・・紙一重であった。

『写シ』状態の身体側面ギリギリに刺突を受け、敵の刀を無理やり貫通させきって躱す荒技ならぬ、荒体捌き。
　実体のままで行えば、今頃は出血多量で意識混濁・失血死は免れないそれを、燕はやり遂げていた。
「何？それ。　何？その不純物」
「…不純物？」
「剣士が、まがりなりにも一門派の剣士が。――――他流をかじって付け焼刃のナマクラをこのワタシに見せるなって言ってるの。分からないかなあ？」
「……」
　呼吸を整える。
「ツバクロユメにとって、剣は全てだった。　これがなかったらワタシはこの場に立っていなかったし、立とうとすら思えなった」
　誰にも。　例え自分にだって知られないように、小さく。少なく。
「ワタシは人を守る刀使である前に、一人の剣士。最期まで剣に生きたし、剣と共に死ねた。――――でもね？」
　・・・ワタシと対等に戦える相手とは、最期まで逢えなかった。
「……」
「燕家は京にいた新撰組副長助謹、沖田総司さんから直々に剣を学んだ家系。
　そこに連なる剣士なら詰まらないモノを見せないと思ってたのに、ホント残念だよ。　この世界の燕結芽」
　当時子供だった燕家の先祖も、まさか子供好きなその辺のお兄さんが泣く子も黙る新撰組一番隊組長だとは思わなかった事だろう。
　燕は両親から教わったご先祖様の身の上を知っていた。
　・・本能のレベルで己の短命を悟っていたのかは分からないが、その沖田総司から天然理心流を学び、代々の燕家当主は家伝の『剣法』と合わせて継いでいったのだと云う。
　眼前のツバクロユメは、それを知らないのだろうか。それともそんな事実など無かった世界の住人であったのか。
「……一つ、教えてあげるよ」

「なあに？冥土の土産？笑えない冗談はやめてよね。　夜見おねーさんに悪いから」
「自惚れないで」
　眼前の全てを断ち斬るように、燕は言葉を振り投げた。
「……――――」
「燕結芽にとって、剣は全て。だってこんな小さな私でも、皆褒めてくれるんだもん。　でもそれは理想に到達する為の過程でしか無い。貴女は、自惚れてる」
「――――へえ？」
「剣士としての未到の先。誰もいない境地の、更に先。　私は例え死んでも、剣士としての矜持と信念を失う事なんて無い。決して」
「――――貴女も病魔に蝕まれて、無念の中で死ねば解るよ。やりたかった事や続けたかった事、その全部が全部澱みたいにくっ付いて離れない。忘れる事も有耶無耶にする事も出来ないッ。
　後悔って、そういうものなんだよ」
「だから化けて出てやるって？嘘言わないでよツバクロユメ。　――私にはわかるよ、貴女はただ我慢できなかっただけなんでしょ？」
　燕が御刀を構える。
　左足を前に、剣先をやや天頂、右肩担ぎに。

『刈流』　指の構。

「…斬り合いの中で――――死ねなかった事を!!」
　燕の後ろ足が地を蹴った。射出するその全身は、まるで大型自動四輪車。袈裟懸けに振り下ろされつつあるその剣に、今や一切の迷いも悔いも無い。
　神速の斬り下ろし。
「ッハハ！　なあにその剣。まるで神道の流派みたい！」
『刈流』において、剣とは腕や手で振るう物ではない。
　体重が前進することで、下方に落ちる事で発生する体重移動力でもって斬撃の動力に充てる。

「しかも遅いしッ！」
その必殺の袈裟斬りを、回転する事で躱す。
そして同時に無防備な顔面目掛けて、ツバクロユメは懇親の一刀を振りかぶ、
「・・・・・・!?」
――らなかった。
燕が斬り下ろした剣が跳ね起きる。斜め下から斜め上に、敵の腕目掛けて。
後の先を取った敵に対し、先の勝機を取る必殺剣。
『刈流』 小波。
「あっぶないなあ!!!」
刀で防ぐ。だが、
「え――――……!?!?!」
繰り返すも、燕の剣は大型自動四輪車と同等である。
人間がそんな運動エネルギーの塊が宿った物体を受け止める事は物理的に不可能であるし、荒魂とて難しい。
つまり、それを受けたツバクロユメは。
「……このぉぉぉぉ!!!!」
彼方に吹き飛ばされたユメは『迅移』を行使し、突き技と斬り技の混成接続技を振るう。それを燕は一撃必倒の剣でもって打ち砕く。
「ワタシと同段階の『迅移』…!」
「――――不可能なんだよ、もう」
剣気に漲らせた瞳で、敵を射抜く。もしかしたらこうなっていたのかもしれない自分を。　人を捨て、現世の人間を襲い、穏世に棲む鬼と化したツバクロユメを。
・・・しかし。
「面白いねっ、流石はワタシの…!」
「――――もう出来ないんだよ」
しかし燕が敵に怯え竦む事は無い。
敵が何処か別世界の戦場界を征覇した畏怖すべき魔戦士であろうとも、

彼女こそはその戦場の常軌を逸して羽撃く魔剣士に他ならない。
「人じゃない貴女がこの世界に来た瞬間から、もう不可能なんだよ。人の剣術（ブレイドアーツ）を理解する事は！」
「アッハハハハハ!!!!」
――愉しい。愉快だ。
痛快だ。
強い人は居た、ここにいた。
もっともっと先へ。更に奥まで。
足の使い方、体の捌き方。運剣法や呼吸に至るまで、この剣士はあの千鳥のおねーさんよりも上を行っている。
――これはきっと前人未到の境地。
無念夢想に、無敵に至ってそれすら超えんとする強靭な心と身体、練り上げられた技術が見せる人間の矜持。
それが嬉しくて、かつて人であった剣鬼が歓喜の声を上げる。
「こんなヒトが、この世にいるなんて――ッ！」
〝小波〟　〝強〟　〝田楽〟　〝剣閣〟
燕が諸々の技を、形（かた）という鍛錬法から練磨された技を繰り出す。捨て技は無く、そのどれもが一撃必殺の域。
――ああ羨ましい。妬ましい。
ワタシはこんな風に、もっともっと戦って居たかったのに…。

・・・・『天然理心流』の、ツバクロユメは不可思議な自覚の中にいた。
先程からずっと全身を纏っていた昂ぶりは変質し、ある一つの感情に己を支配下に置いている。
消えたのではなく。
藍より青くより黒く、まるで月空のように静かで、より強い何かに押し退けられている。いや、内包されている。
そう、言うなれば其れはシンプルな――

・・・・『刈流』の、燕結芽は不可思議な自覚の中にいた。

先程まで全身を纏っていた昂ぶりは変質し、ある一つの感情に己を支配下に置いている。
消えたのではなく。
静かで、より強い何かに押し退けられている。いや、内包されている。
そう、言うなれば其れはシンプルな――――

「……いい夜だね。本当にいい夜なのに、」
「――惜しいかな。どうやらそろそろ、幕が近いみたい」
闘争心の果ては何処か。
優劣勝敗は武の神のみが知るところ。
刀を鞘に納めて大きく後退した燕と、左八相の構のツバクロユメ。
どちらが勝ってもどちらが負けても、どうか御照覧あれ。
どう転ぼうとも、わたしの剣はここに残る。
「いざ尋常に――――」
「勝負!!!!!!」

ブレイドアーツ　2

一太刀で勝つ。
地を蹴り、風を斬り裂く鳥を真っ向から見据え、ユメは心中に期した。
二の太刀などは無い。
一撃で仕留められなくても次がある、などという考えで勝てる相手ではないのだ。
『一撃、必殺』
実現するには間合を掴まねばならない。燕の疾駆を捕捉しなければならない。だが、それこそが至難であった。
「――……」
燕の疾駆は歩速を、歩幅を一定にせず、だが一貫して疾走。この剣を振り下ろして確実に斬り殺せる間合を、掴みきれるか。
少なくとも今現在、『迅移』の最中にあるツバクロユメにはそれを為し遂げることは出来ていない。
――そう。
居合術。その真の恐ろしさはここにある。
刀を鞘に納めた剣士を眼にした者の多くは、眼にも映らぬ早業で刀剣を抜いて敵を斬る事で、勝ちを得るのだと思い込むのであろう。
だが、違う。
居合は、今。
間合を詰めるこの足から始まっている。これが既に技なのだ。
――ジゲン流という剣術がある。
薩摩藩の御留流である示現流をはじめ、その源となった天真正自顕流など同系緒流は数多いが、
その中の一つに野太刀自顕流（別称を薬丸自顕流）というものが存在する。

この流儀の『懸かり打ち』という、トンボ（刀を右肩上、天頂に向けてとり、左足を前に右足を引く構）から疾走して敵に駆け寄りそのまま斬る技は、幕末維新の日本を震撼させた。

なぜ、かくも一見して至極単純な剣にそんなことが出来たのか。

・・・よく語られる理由としては、その威力に比類がなく、受け止めても押し切られてしまったからだと云う。

間違いではない。

だがそれだけならば、受け止めず避ければいいだけの事だ。　だけの事、というほど楽ではあるまいが。

・・・一説によればその真髄は、間合を奪う点にあったという。

猿叫をあげ、疾走してくる薩摩隼人を前にした時、多くの剣士は肝を潰して間合を見誤り、届くはずもない距離で手を出してしまう。

そして空振りし、斬られる。

あるいは立ちすくんで何もできずに斬られる。

敵が間合をしかと見定め、斬れる距離に入るまで手を出さぬ者であるなら、ジゲンの剣士は自らの足で間合を奪う。

即ち、最後の一歩を飛ぶに等しい大股の踏み込みとし、走る速度に慣れた敵の眼を欺くのである。振り下ろす機を失した敵の太刀は宙に留まり、その身はジゲン流の一刀を受ける事になる。

・・・しかし、時には刺し違えになる場合もあった。

ことに突き技で迎え撃たれると、そうなりがちだったようである。

剽悍なる薩摩隼人は、だからといって恐れたりしなかった。

生命の価値は薄紙一枚分と豪語し、確実に敵を殺傷するこの剣を振るいに振るった。かくありてこの剣は激動の時代をも震撼させたのだ。

・・・同じ時代を生きた新撰組局長・近藤勇は、薩摩の初太刀は必ず外せと隊士達に厳命したという。強さを得た者は、同じく強きを知る。

――燕はこれを居合に応用したのだ。

ツバクロユメは見切った。　この技は懸かり打ち同様に、疾駆から

開始する。
走行に幻惑された敵が間合を見誤り、届かぬ剣を振り下ろし。あるいは剣を居付かせて無力となった時、
燕は疾走のまま抜き打ちで斬り捨てる。
例え敵が間合を正確に把握し、燕を斬り裂く剣を振るったとしても。
『迅移』の段階を変化させ、普遍の時間流を違える事で躱して斬る。
燕の千変とも万化ともいえる歩法、そして『迅移』の早さを見切って、間合を捕捉して斬る事などは正に不可能とさえ言えよう。

――勝機は。　あるとするならば、一刹那。
こちらが先手を打った場合、燕はある段階で、先制攻撃に対する居合の為に『迅移』の段階を変えようと意図を切り替える。
その瞬、吾が最高段階の『迅移』を行使して斬る。誰もワタシに追いつけない。
すなわち、先の勝機。
「――、――」
さしもの燕も確実にその機を捉えられたならば、もはや手も足も出まい。　こちらが為す事は、3段階を超えた4段階目の『迅移』。
穏世で修業を積み、この燕結芽よりも洗練させたモノ。
これを凌駕する『最終段階』は、誰にも出来ない。
・・・例えそれが出来たとしても、使用者を穏世に引きずり込ませて戻れなくさせるそれを、他ならぬ自分が使うわけが無い。
そして両手で刀を抜き放った状態のユメと、片手で斬る事となる居合抜刀の燕とでは、構造的速度差から鑑みて勝敗は歴然。

――先の勝機に仕掛ければ、勝てる。

燕結芽相手に、その勝機を掴む事さえ出来れば。
ユメは両眼を限界まで見開き、燕を見据えた。この目蓋は決して閉ざさないと誓って。

閉ざすのは勝った時。
敗れた時は。
――その時は、きっと。

◇

間合が狭まる。際限なく。
指呼の間が対話の間に、対話の間が斟酌の間に。
それさえ過ぎて。
二人は互いの瞳の中に、己の姿を視認した。
「――ッッッ!!!!」
ユメが気を吹いた。射出される全身。
迅る移ろい。
燕はまだ『迅移』を変えていない。右手を柄にかけてさえもいない。
この間合で逃れることは不可能の極。
ユメの一刀は勝機を獲った。
――天然理心流裏・我流、奥義の極　〝雲竜〟

◇

・・・・。
風に乗り、風を斬り、消えない雲は竜巻となって地をたゆたう。故に雲竜。
・・・・、何処だ。
理心の教えは唯一つ。天然自然の法則に従う事。この世に生きるもの悉く、それに背く事は出来ない。
ならばこそ、ツバクロユメには解らない。
穏世の側の存在であるからこそ、眼前の光景を理解する事は決して無い。
・・・・燕結芽は何処だ。

「――ウソ」
ホント。　と、ユメには聞こえた気がした。呆然の中ふと見上げた空の上で。
――それは魔剣であった。
ベースとなった技術は、『刈流』〝奔馬〟である。
皐月夜見に破られたように、〝奔馬〟にはウィークポイントがある。
それは前進・後退・前進というコロコロ変わる身体の運動ベクトル。
敵を斬る為の前進、敵の攻撃を躱す為の後退、そして反撃の為の前進。
燕はこれを独自の工夫を加えて昇華させた。
技はジゲン流・懸かり打ち同様、疾駆から開始する。
走行に幻惑された敵が間合を見誤り、届かぬ剣を振り下ろし。　あるいは剣を居付かせて無力となった時、燕は疾走のまま抜き打ちで斬り捨てる。
だが敵が間合を正確に把握し、或いは『迅移』を使い、燕を斬り裂く剣を振るう場合もある。その時、彼女は未来を捻じ曲げるのだ。
敵が繰り出す剣は、『燕が走り続ければ』当たるもの。
――燕は、飛ぶ。
『迅移』のまま疾走、そのままに踏み切り。運動力を損なう事無く。
敵の斬撃を飛翔して避け、宙にて前転、そこからの抜刀斬撃。
間合の読みづらい抜き打ちが空からの技と判らなければ、もはや剣筋の見切りは不可能とさえ言えよう。
先手を打たれれば、飛んで斬る。
後手に回られれば、駆けて斬る。
元来が屈強の剣使いであった燕結芽がその地位に安住せず、必勝不

敗の更なる高みを目指して見出した技法。
鍛錬、経験、心気、勇猛、命欲、生死。
そのような通常の剣術が厚みを増し、力を鋭さを高める為に求める諸々を一切重要とはせず、ただ燕の才能と確立された技術にのみ立脚する剣。
冷静に、勝利を行う技術機構（システムオブアート）。
・・・・形をなぞるなど、誰にかできよう。
特に、時間流を異にする『迅移』を使うことが当たり前な刀使相手にこの剣を生かすには。
敵の剣の間合、速度、どの段階の『迅移』を使ったか等の瞬間を毛筋のずれなく確と捉え、即、次の行動に移らねばならず。
かような要求に実の戦中で応えることなども、誰にかできよう。
最高の『早さ』を、最良の運動『効率』で凌駕し尽くしてこその剣。
――燕の剣はここに結実した。
彼女の家に伝わる剣法の鬼子。
敵の所作を寸毫たりとも余さず逃さず把握し応じ尽くす、刀使いが持つ信念だけが、この天の怪奇を現実のものとした。

――我流魔剣　昼の月

◇

あらゆる状況を想定してそれに打ち勝つ技を用意する。そこまで達すれば、確実に無敵である。
無論、夢だが。矮小な人間が空想する下らない幻想だが。
果てなる高みを目指して、一歩一歩進んで行く事は可能なのだ。

◇

刀を鞘に納めると同時に着地。聞こえたのは、断末魔にも似た敵の、か細い声。

「純度が足りなかったかな。……あんなの見せられちゃ、何もする気がなくなっちゃうよ」

「……」

振り返ろうとして、燕は止めた。

「それで良いよ、ワタシとは違う燕結芽。　貴女は貴女の道を往けばいい」

「……――――、」

燕は最期までその姿を見る事は無かった。

ただ二人を繋ぎ続けている声だけが、癒えない傷のようにこの場に残った。

「…強かったよ、ツバクロユメ。何度死んでも忘れられない位に」

高鳴る鼓動が、さっきまで彼女がここに居た事を教えてくれる。誰よりも鮮烈で、剣に生きた何処かの誰かを。

・・・燕が振り返ると、そこには皐月夜見が倒れていた。

――――果たして今までは夢だったのか。

笑うように、蛍のような火がそこかしこに舞う中、燕は夜見を助け起こした。

◆

「えいッ!!!」

「そうそう、その調子その調子」

――――いつから始まったのかはもう定かではないが、師匠の稽古は

厳しい。　たぶんここは現実ではなくて、あの世とか夢の世界とでもいうのだろう。
　目を覚ませば全部忘れてしまう程、ゆらゆらとした世界がここの全て。
「師匠」
「ん？なあに？」
　私の師・ツバクロユメさんはここでいつも笑っている。
「…貴女はてっきり、消えるものだと思っていました」
「夜見おねーさんが一人前になる迄は消えないよー。　ワタシ、一番弟子の事が心配だもん」
「ありがとうございます」
「お礼を言うのはこっちの方なんだけど……。まあ、いっか」
　師匠が高津学長と真希さんを倒すだろう事を、ここに居る私は分かっていた。多数の人を傷付け、迷惑をかけるだろう事も。
　でもこの人は一線を決して忘れないと思っていた。剣士として刀使として、刀を振るっていたあの日々と心と魂も。
　たとえ死んでも。
「貴女は私の師匠なのですから」
「…え？　うん、…まあそうだけど？」
「感謝しています」
「な、何だかこそばゆいなぁ…。あっ！そういえば明日御前試合なんだって？」
「はい」
　私の言葉を聞き、意を得たとばかりに師匠は刀を抜く。
「多分、夜見おねーさんはこれから沢山の刀使と戦う事になるかもだけどー……」
「そうなのですか？」
「ワタシが居た世界の話だから、全く同じじゃないと思うけど。似た様な感じにはなるかもだね！」
　喋りながら袈裟懸けにブンブンと素振りする。
・・・まだ戦い足りないのだろうか？

「ああ、心配しないで。もうあっちに用はないから」
「…そうですか」
「うん！　――ただね～、一つだけ癪に障る事が有ったから～～、」
斬り下ろした状態で、ピタリと刀をとめる師匠。
「――もしね？　夜見おねーさん」
「？　はい」
「これから先、もしも変な居合を使う相手と戦う事になったら…、」
「なったら」
私の同僚の燕さんに似た、にっかりと笑うその姿。私・皐月夜見は起きてもそれを忘れないと強く思った。
「――これを使ってみて？」
鍔の眼をくるりと返す一人の剣士を。
私はいつまでも、この心に刻んだ。

例えばこんな刀使さん
『ＩＮ　ＭＹ　ＳＰＩＲＩＴ』